

「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ― 神戸大空襲の後、母きみは昭男以外の弟妹を連れ、自分の里である広島市郊外の実家に疎開した。父治一はその前からすでに家を出ていたが、ある夜突然、昭男一人が残っていた神戸の家に顔を出した。そして昭男に、一緒に奈良に行こうと説得したが拒絶され、一人また闇の中へ去って行った。―

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp)

8. 原爆

広島その日は朝からうだる様な暑さで、すでに7時を回る頃、夜明け前から畑の仕事に出ているきみと、実家の親兄弟はもつ全身汁びっしょりになっていた。「ちよつとここらへんでひ休みするかのつ。」きみの母タケが皆んなに声を掛けた。「きみ、またわしらは帰られんけ
ひっぺん戻って見て来てやったらどつかのつ。」タケは朝出る時には、まだ寝ていた小さい孫達



を氣遣って声を掛けた。「大丈夫や、芋をふかしといたさかい、高子が食べさせとるよ。」きみかない時には、高子の子の面倒を見ることになっていた。「それに、今日は軍事練の日やよつて、みんなもつ教出とるわ。」「そつか、心配ければいいんじゃ。」タケは納得した様子だった。と、突然

「なんじゃ、街の方でサイレンの首しとらんか？」急に誰かが話した。「はんまじゃ、あれは、警戒警報か？」「それにしても、飛行機見えるかのつ？」皆なか立ち上かつて山谷いから広島街の方を覗き込んだ。「いいや、何も見えん。」「何かの遅いやつたんかのつ。」「ま、どつちにしてもここまでは爆弾飛んでこんやろ。」「ここには何も無いけん安心じゃ。」「狙われとるとしたら、宇品の飛行場じゃろ。」「あそこは、まだ残つとるけんね。」「呉に來た時は、軍艦なんも残つとらんかったけん、アメリカさんがっかりだったらしいよ。」「そいじゃけん、街に一杯爆弾落としていきよつたんじゃ。」

「もうこの戦争は、めちゃくちゃなもんになつとる。」皆んな口々に話をしてたその時。街の方が猛烈に明るくなり、太陽が墜落でもしたかと思つたら、次の瞬間凄まじい爆音と激震が襲つた。「地震だあ！山が崩れるぞ！一斉に皆、近くを流れる用水路に身をかがめ、頭を水に浸けた。どれくらい経つただろうか、震れが治まり、川の外に頭を出した。「一体どうなつたんじゃ。」「見て！あそこ、あんな雲が・・・。」きみが街の方を指差し、呆然と立ちすくんだ。「なんじゃあれは、入道雲か？竜巻か？」それはまぎれ



もない、原爆の「キノコ雲」だった。「雲が広がっていく。広島街が何も見えなくなっていく。」「臭つ暗じゃ。」「どないなつてしもたんじゃ。」「きみ！高子達は？」タケが大声をした。「どないしよつ。とにかく早くつちへ戻ろつ。」「今度は何じゃ、雨か。」一人が空を上げ、「墨じゃ、その雨。臭つ黒じゃ。」「もうこの世の終わりなんかのつ。」黒い雨に打たれながら皆んなは、家路を急いで走つた。

(つづく)